〔書評〕

中西健治編著『源氏物語忍草の研究 本文・校異編 論考編』『同 自立語索引編』

原 豊二

『源氏物語』の研究分野の一つに「享受」の研究というのがある、と一般には認識されている。最近、このことに疑問を抱くようになった。というのは、中世や近世における『源氏物語』関連書のほとんどは、『源氏物語』を消極的に「受け手」として「享受」したものでは到底あり得ないからだ。今まで『源氏物語』の「享受」資料とされた多くのテクストが、実は極めて主体的な立場を堅持し、多くのメッセージを伝えていることは誰の目にも明らかなことである。よって、これまでの『源氏物語』の「享受」や「受容」などと言った消極的な創作意識を示す用語を用いることは休止すべきであり、こうした中世・近世のテクストの自律的なあり様を積極的に評価する学究態度へと考え方を転換すべき時が来たと考える。中西健治氏の編著書『源氏物語忍草の研究』は、そうした姿勢を推進する根拠となる研究成果として、今後の評価がなされるものと私は思う。

さて、小林健二氏は『研究報告 基幹研究「王朝文学の流布と継承」』（国文学研究資料館、二〇一一年）の「はしがき」において、次のように述べている。

従来の古典文学研究は、ともすると作品や時代ごとの枠組みに拘束される面があり、より成立年代に近い古写本や善本に関心が集中しがちでした。また、逆に近世の研究者は、中古・中世に成立した古典文学が、近世期にいかに受容され位置づけられるかについては、あまり関心を示さなかったと言えましょう。しかし、『伊勢物語』『源氏物語』などを始めとする王朝文学は、何百年という時代の波に洗われて現在に至っており、そこに様々な享受や再創造の営為があったことは言うまでもありません。こうした時代の営為を精査することにより、当該作品の享受だけではなく、そこから古態への遡及、あるいは既に失われてしまった逸文・逸書の復元も可能になると思われます。

今まで、中世や近世に「再創造」された『伊勢物語』や『源氏物語』の関連書の研究は、主に中古文学研究者が担って来たという、常識的ながらも実はいくらかの違和感を伴う問題にここでは触れている。一方、中古文学の研究者は、その写本等が中世や近世に作られたものであったとしても、それを全面的に中古の文学作品として見ることに疑いを持つことさえなかった。この小林氏の「はしがき」は、このような研究主体の現実に一石を投じる貴重な内容を含むと考えられる。

北村湖春著『源氏物語忍草』（以下、『忍草』とする。）と、この度の中西氏著書に話を移そう。

まず『忍草』であるが、これまでもいくらかその研究はあったが、体系的・学術的に全体をまとめ得た成果はなく、中西氏著書の意義はここにありと言って差し支えない。もし、これが研究成果として時期が遅すぎたと考えるのであれば、それは長い間続いた近世期の「享受」資料への一方的な軽視によるものに違いない。『忍草』の営為は、少なくとも「再創造」として考えるべき事柄であろうし、同様にその研究も好事家のための単なる「資料紹介」であってはならない。

中西氏著書は、全二冊構成となっていて、一冊目には「本文・校異編」と「論考編」が収められている。「本文・校異編」では、天保五年六月の成島司直の序文を持つ著者所蔵の版本を底本とし、十本の写本を対校している。『忍草』に関する本格的な校異が示されたのはこれが初めてであり、文献調査の成果としての価値がここに十二分に認められるわけである。「論考編」は、西川響子氏と須藤圭氏との共著であるが、書誌ならびに文献的な問題は中西氏の手におおよそ負っている。二冊目の「自立語索引編」は、助詞・助動詞を除く語彙の索引となっている。この「索引編」の作成には多大な労苦のあったことが推察される。

さて、本著刊行以前にも、既に中西氏は『忍草』に関する論考を発表し続けており、そうした成果も併せて読んでいただきたいと思う。以下、管見の限り示しておきたい。

①「小野高校蔵源氏物語忍草について」「春曙文庫蔵源氏物語忍草について」『平安末期物語巧』所収（勉誠社、一九九七年）〔初出はこれより前〕

②「北村湖春『源氏物語忍草』の「跋文」について」『解釈』六〇八号・六〇九号（二〇〇五年）

③「源氏物語忍草本文校訂劄記」『立命館文学』五九八号（二〇〇七年）

④「「あえかに」か「ひはづに」か—源氏物語忍草・若菜上・下巻本文検討から—」『平安文学研究・衣笠編』（和泉書院、二〇〇九年）

⑤「源氏物語の隠れた読み巧者—北村湖春の人と仕事—」『立命館文学』六一二号（二〇〇九年）

また、『平安文学研究・衣笠編』第二輯（二〇一〇年）は、

「『源氏物語忍草』特集」号であり、中西氏の「巻頭言」に加え、荻田みどり氏、岸本悠子氏、須藤圭氏の論考を掲載している。加えて、中西氏著書の『雅文遠望―茶屋峠を越えて―』（私家版、二〇一〇年）にも『忍草』に関する記述があり、一読の価値を有する。要するに、本著は中西氏の長期にわたる『忍草』研究の集大成であり、こうした研究成果がおおよそこの一冊において達成されているわけである。今後の学界への寄与が期待できる好著となるに相違ないものと考える。

しかしながら、本著のより具体的な活用の方法はどのようにあるべきだろうか。本著によって、書誌学的あるいは文献学的な研究は一応の達成とされるべきであるが、『忍草』というテクスト自体に回帰される歴史性や文学テクストとしての評価に関わる問題は、改めて考察されなくてはならないだろう。

やや大きな視野に立てば、湖春の父である北村季吟との相関関係をどう見るかという問題がある。言わずもがな季吟は多くの古典文学作品の注釈を行った人物であり、例えば『源氏物語』研究においても、その著『湖月抄』は今なお大きな影響力を持っている。『忍草』を『湖月抄』的なマクロな世界を体現した一種の縮小物であるとすれば、その内容は北村父子の最も強く伝えようと望んだ『源氏物語』のエッセンスを包摂していると考えるべきであろう。北村季吟の多くの業績には、湖春の献身的な貢献があったというのが、現在考えられる当時の学究状況であるからだ。

また、『忍草』に『源氏物語』の「再創造」としての価値を見出そうとするのであれば、そこには江戸時代（主に元禄期前後）という「再創造」の同時代的な歴史性を掘り下げることが求められる。そのためには近世文学研究者や近世史研究者との共同作業が必要であろうし、同時にそれは近世における出版のあり方にも深く関わる事柄である。中世の『源氏物語』の梗概書が連歌のための手引書としての側面が強かったのと違って、元禄期前後の文学的状況は、単純に創作の補助となるようなテクストをそこに求めていたわけではないだろう。『忍草』の出版が天保期までなされなかったことは疑問の一つとして残るが、中西氏著書によって、そこに至る「写本」のあり様が示されたことはやはり重要である。『源氏物語』ではなく、『忍草』がどのように読まれ、活用されたかについて、さらに真摯に探究されることが求められよう。

一方で、近年、江戸時代における『源氏物語』について論じた書籍が多く刊行されているという事情も踏まえておくべきであろう。『源氏物語』の「享受」史の研究が主に中世期を対象にした時期の長かったことを思えば、こうした状況自体は歓迎すべきことなのかも知れない。しかしながら、中世に比べて江戸時代の方が圧倒的に関連資料が多いことから、その全体像を把握しづらいという点、また『源氏物語』を認知する上での「型」が固定化・ステロタイプ化され、そうしたものが単純に再生産され続け、その結果、どこまでが著者・編者の独自性によるものか不明瞭になりがちである点などを考慮すれば、江戸時代の『源氏物語』を理

解・掌握することの難しさは言うまでもない。昨今、『源氏物語』の研究に関して、絵画資料を用い、研究の補助線とすることが流行っているように思うが、特に江戸時代の「源氏絵」の豊富さは、かえってこうした難しさを助長しているように思うのである。このような雑然とした江戸時代の『源氏物語』の「享受」、あるいは「再創造」の研究については、やはり毅然とした筋道を定めなくてはならないだろう。かつての中古文学会での一齣であるが、江戸時代に描かれた、王朝文学をモチーフとした絵画資料を紹介する発表に対して、故三谷邦明氏が「こうしたものを学問の領域に入れてよいのか」という主旨の発言をされたことがある。ややもすると江戸時代の『源氏物語』研究はこのような趣味的・好事的な博物学的収集に留まってしまうきらいがある。

こうしたことから、私が思う範囲のことを言えば、まず近世初期からの公家衆による『源氏物語』研究やその「再創造」のさらなる調査研究が求められる。そして『湖月抄』を中心とした北村父子及びその周辺の学問の状況、さらに後の国学者による研究と、この三箇所に主な軸足を置くべきではないだろうか。もちろん多様な意匠をその研究対象にしてはいけないということはないのだが、こうした体系的な学術状況を把握した上で、これらに手をつけて欲しいと密かに願うものである。

私も不惑を前にして、中古文学会（界）の流れをいくらか見渡すことができるようになったが、その時々の流行というものがあったのだと振り返って思うことがある。それについて否定はしないし、だからと言って文献学的な処理だけが「文学研究」とは思わない。それだけ文学のあり方が困難に直面しているということなのであろう。

『忍草』によってなされた、高度な手法を伴うテクストのミニチュア化という現象を見ていると、時に痛々しいものを感じることがある。湖春が相当な能力と技量をもってして、その梗概化をなし得たのは明らかである。ローラー式に学識をひけらかすような、だらだらとした文章を書く方がいとも簡単であることは、真摯な研究者であればすぐに理解するに違いない。多くの学識や知見を削ぎ落とす、こうした湖春の執筆姿勢を「痛々しい」と思うのである。『源氏物語』を自らの血肉とした、その文章を削ぐ。例えば、私のような自己顕示欲の強い人間にとって、それは刑罰にも等しい。それでも、湖春がそのミニチュア化をなし得たのは、文学の危機的状況を脱するため、近世に勃興した多くの新興文化層に『源氏物語』を伝えなくてはならないという社会的な責務があったのではないか。やや憶測が過ぎたが、『忍草』は決して安直に書かれた梗概書ではないのである。

私自身、『忍草』との関わりは、鳥取県の琴浦町にある河本家（稽古有文館）の蔵書調査の中で、初めてその写本に触れたことがきっかけだった。拙著にそのことを書いたので、その後、中西氏へ紹介することになったのである。中西氏は多忙な中、河本家に近いJR赤碕駅まで来られた。実はその時初めてお会いしたのであるが、氏が『忍草』のために遠方まで来ていただいたのに、

ほとんどおもてなしのできなかったことを悔やんでいる。なお、中西氏著書の「本文・校異編」に「稽古有文館本」とあるのは、この河本家蔵本であり、このような経緯によって本著に表わされている。本著の成り立ちの一断片として関われたことを光栄に思うのと同時、中西氏による地道な文献調査によって本著が出来上がっているということを、ぜひ知って欲しいと思う。

（和泉書院、二〇一一年一月三一日、四五二頁・三一九頁、定価一八、〇〇〇円＋税）

（はら・とよじ　米子工業高等専門学校准教授）